の寛弘五年(一〇〇八)九月の御産時には「いたゞきにはうちまきを雪のようにふりかゝり」(『紫式部日記』)、白川院中宮の承保元年(一〇七四)十二月の御産時、産屋を「雪の山に入りたらん心地」(『栄花物語』)とあることは留意される。泰澄生誕時の降雪も雪の山の表出であった。お産は年中あることであり、従って白山の雪は消え残ることが肝要で千歳雪でなければならなかった。白山社が西国に比して東国に多く分布する事実が降雪と関係あろう。

四つに、空海入定信仰は五来重氏が『金剛峰寺建立修行縁起』成立年の康保五年(九六八)をまたなければならぬとし、泰澄入定は法華経から解釈しなければならぬ。法華経の説く常在靈鷲山を「わしの山また有明の月もみす世をうき雲にそらがくれて」(『久安六年御百首』)のように、涅槃が虚隠れに生成されはじめると、泰澄の入定留身が説かれることにもなり、白山禅定と女人禅定が成立するのである。この禅定の原初形態は御山信仰時代の成年式と、記紀の伊弉諾尊の黄泉帰りと人の生死起源神話に求められ、白山神も諾冉や菊理媛になった。

五つに、現存する『泰澄和尚伝』成文化は天台末となった越前馬場本宮の平泉寺が大きく関与しており、弘安五年(一二八二)には成立していたことを知る(『鎌倉遺文』一四七六二号文書)。白山が如法経修行の靈山で、平泉寺が天台末であった立場から、『泰澄和尚伝』を解釈しなければならない。

祈禱寺院における聖地空間と信者のニーズ

阿部友紀

本発表では、善宝寺境内をA寺院中央部、B貝喰池、C龍澤不動尊、D持国岩の四区域に分けて概観し、聖地空間の再編成がいかになされていたかを指摘した。Aの寺院中央部に、善宝寺の修行寺・回向寺・祈禱寺の機能が集約されるよう堂舎を拡大してきた。信者はこの中心部に参拝し祈禱等を受けるが、イニシアチブは信者ではなく僧侶にある。Dの持国岩の場合、聖地としての機能を実質上失っていった。対してBの貝喰池の場合、お水取り式の事例では、信者側によって儀礼の実施に関して重要な役割を果たした。この儀礼が貝喰池を舞台に行なわれるということは、貝喰池が龍神が棲む池であるという伝承と関係が深い。中央部の龍王殿は龍神を祀る場所であり、貝喰池こそが龍神が棲む信仰の聖地であるという信者が多い。つまり大本堂にて僧侶によって執行される祈禱から得られる「ご利益」と、貝喰池に信者自らが赴き、祈りを捧げることによって得られる「ご利益」の二種が意識されている。仏教儀礼の祈禱会・読経による功德と、地主神・守護神である龍神を信仰することで得られる「ご利益」を両立させることで善宝寺信仰が成立している。前者の祈禱・読経は寺院側僧侶中心だが、後者の貝喰池を中心とした龍神信仰に関しては、信者によるイニシアチブにより儀礼が実施され維持されてきた。Cの龍澤不動尊の場合、信者の自発的なイニシアチブによって聖

地空間の整備が行なわれたというのは、お水取りの事例と同様のように思われる。お水取りでは龍神に託宣に基づき儀礼を実施し、さらには「龍神の血」という意味付けにより儀礼を实际的な「ご利益」と結びつけた。対して不動尊の場合は、靈能者の霊夢というかたちで整備をうながし、寺院側の協力を得ている。その際には不動尊を荒廃させたままだと善宝寺の験力が半減するという解釈がなされている。その点では信者により聖地空間の再解釈と拡張が行われたといえる。

もう一点重要なのは、貝喰池のお水取りの儀礼と「龍神の血」という言説、不動尊における「験力の半減」という言説が、寺院側Ⅱ僧侶によってその宗教的解釈が受容されたということである。つまり寺院Ⅱ僧侶側も信者の勝手な解釈であると拒絶せず、信者からの要請という形で寺院内に位置づけていった。なぜ善宝寺は信者からの要請を取り入れていくことができたかについて、その要因を四点指摘しておきたい。一つには善宝寺の信者の拡大、龍王講の発展という方針に合致したことがあげられる。二点目として、信者から要請が曹洞宗寺院としての、または教義の根幹に関わるような要請ではなかったということである。三点目は僧侶にイニシアチブがある寺院中央部の再編を促すことではなかったということがあげられる。信者が要請したのは貝喰池と不動尊という、中心部から離れた周辺地区である。中央部の再編を信者から促されるより、相対的に抵抗が低かったのではないだろうか。最後に信者の要請は、既存の聖地空間に対して再解釈による意味づけをしたものであったということである。お水取りの場合、以前は行なっていた行事

を「復活」させたことになっている。龍澤不動尊も以前に不動明王の霊場であったところに「験力の半減」からの回復という論理で整備していった。このような信者の要請は、新たな聖地の設置や既存の聖地を否定するものではなく、既存の聖地空間を他の解釈で再認識するものであったことが、僧侶に受容される結果を生んだといえる。信者からの要請が善宝寺の立場と対立するような内容ではなかったがゆえに、その要請が寺院側によって「正当性」を与えられ、聖地空間の再編成につながっていったといえる。

仏神の現代的展開

——金毘羅神のポストモダン——

白川 琢磨

一般に「金毘羅さん」として親しまれてきた讃岐の国、象頭山の金毘羅大権現の史料上の初出は、元亀四年(一五七三)の金毘羅堂建立棟札である。そこには、「金毘羅王赤如神」の宝殿を造営したのが「松尾寺別当金光院権少僧頭有雅」であり、本尊鎮座の法楽の導師が「高野山金剛三昧院権大僧頭法印良昌」であったことが記されている。当時、松尾寺の本尊は本堂(観音堂)に祀られる十一面観音(聖観音との説もある)であり、本堂北方には鎮守神として「三十番神」が祀られていた。本堂の別当は「普門院西淋坊」であったと推察される。この金毘羅堂の建立を起点として、金毘羅神の三十番神に対する凌駕、金光院の普門院に対する凌駕が進行し、やがて金光院の一